

1 1. 《街路樹にレモン?!》

現在、東京は、明治大正期の気温と比べて、2～3° 上昇しています。平安時代の気温に近くなっています（中世温暖期）。

そのときの街路樹は何だったかというと、柑橘類（かんきつ：オレンジ類）などでした。旅行中に、水分補給できることを考えていたのです。武蔵国にもタチバナ（橘樹）郡があるように昔から馴染の深かったことが分かります。

ひな飾りには、タチバナと桜を両脇に据えますが、柑橘類のタチバナがあるのは、中世において身近でめでたい樹だと認識されていたからです。

そもそも柑橘類はインドから世界に伝わったとされます。中世温暖期に、東方に伝わって日本の街路樹となり、西方はイスラム教とともにスペインまで伝わり街路樹となります。

現在の東京の街路樹の樹種は、ほぼ、寒冷期の明治大正期に決められました。明治後期から本格的に植栽され、関東大震災で防火機能も認められたことから、さらに積極的に植栽されます。

そして現在、60万本の街路樹（平成21年度末）があり、100万本に増やそうとしています。また老木が増加して倒木などが多発し始め、マニュアルを作成して樹木の診断点検が行われています。

これからは、ヒートアイランド現象や地球温暖化現象に適応した樹種を取り入れて良いと考えます。

そこで私は、マッカーサー道路などに、打ち水水路と合わせて柑橘類、例えばレモンの木を植栽してはどうかと考えました。そうすれば、涼やかな癒し空間に、スキっとした微香と木陰を提供できることでしょう。

なお、暖かい地域が原生地であるクスノキの大木が、なぜか寒い東京の皇居周辺に多く植わっています。明治以降、天皇のために武家政権と戦った楠正成にあやかって植えられたと推察します。クスノキは、春に新葉と入れ替わるように落葉します。

写真は、外堀通りの歩道の風景（虎の門方面から虎の門ヒルズ方向）に、柑橘類を植栽した打ち水水路を合成したイメージ画像（パシフィックコンサルタンツ提供）

猛暑時の打ち水とともに、涼やかな癒し空間の提供によるカフェテラスや市場の呼び込み。



防災水ピットの配置による臨災時における多摩川上流からの緊急用水の導水。